

〈一般研究課題〉 和紙、天然染料利用によるインテリア素材の開発
助成研究者 愛知県立芸術大学 柴崎 幸次



和紙、天然染料利用によるインテリア素材の開発 (中間報告)

柴崎 幸次
(愛知県立芸術大学)

Research and development on the use of Japanese paper and natural dye as material for interior products (Interim report)

Koji Shibazaki
(Aichi Prefectural University of Fine Arts and Music)

Abstract:

The main purpose of this project is to apply traditional Japanese paper making method and natural dye, to create Japanese paper out of different kinds of wild grasses, and to put its beauty and variety into practical use as raw material for lighting fixtures and for wall papers.

The result of the study is planned to be presented in the form of an Exhibition on samples of the Japanese paper.

As it will take over one year to create such Japanese paper samples, in this interim report, I will outline the purpose of this research project and explain the traditions and history of Japanese paper as a culture.

はじめに

日本の和紙生産は古来より伝わり、手漉き紙の歴史は1500年とも言われている。特に江戸期は書写用紙を中心とした日本の代表的な産業として最盛期を迎え、各地でその風土気候を利用した原料の調達と独自の製法により、その地の特性を生かした形で発展を遂げてきた。近代になり洋紙の台

頭や機械漉き和紙が増え、原料栽培と手作業も海外移行などがすすみ、現在は和紙の産業は縮小傾向にあり伝統製法による日本の手漉き紙は特別な存在になりつつある。近年全国に広がった和紙産業が地域性を表す文化のひとつとして研究され、地域の独自性の創出などの再評価が盛んに行われている。元来紙質が強靱で書写、美術用紙としても優れた特徴を持つ日本の手漉き和紙は、様々な用途で現在も生産され、さらに付加価値の高い紙の研究も盛んに行われている。和紙の需要は近代では書写用紙としての用途が圧倒的に多かったが、現在は多彩に使用され美術的用途で使用することも多く、パッケージや照明器具、インテリア素材として注目を集めている。

手漉き紙の主な原料は楮（コウゾ）、三桠（ミツマタ）、雁皮（ガンピ）などの靱皮繊維であるが、過去には麻、竹、雑穀など天然の原料を使った手漉き紙も存在し、その土地の身近な材料で紙漉が行われてきた。実際に手漉きにて紙にならない植物は無いという報告もあり、身近な野草などの雑草もその植物に応じた個性を表す紙として漉き上げることができる。和紙の評価が多様化している現在、植物独自の個性が見出せる紙として生産過程から材料までのプロセスが読み取れることは人の心に訴える精神性を持った素材として、それが現在のものづくりに受け入れられると考えている。

本研究は和紙と天然染料での素材開発を目的としているが、まず日本の和紙文化に着目し幅広く調査を行い、現代における和紙の在り方や日本独自の和紙文化が形成してきた精神性の部分についても考察する。また、実際に様々な植物の手漉き紙の制作を通じて、紙のインテリア素材としての可能性について、質感や美点など研究することを目的としている。

この研究報告では、サンプルの制作に1年以上の年月が必要となるため、中間報告として本研究の目的と日本の和紙文化に関する考察を中心に述べることとする。

1 和紙文化が物語っているもの

(1) 日本文化と和紙

日本の和紙文化の歴史は古く4, 5世紀には中国から伝わり、仏教と同時に各地で和紙生産が広まったとされている。平安期には大和絵や和歌など文学の用途で多彩な和紙が作られていたが、雲母引きや金銀箔を使った砂子散らし、雲竜など、世界でも類を見ない多彩さと品質は日本の歴史・文化やそれを支えた工芸技術を色濃く反映している。また江戸期には、楮、三桠、雁皮に代表される原料により品質の高い和紙が全国各地で生産され、特に最も主要な原料の楮は日本全国どこでも生育がよく、それぞれの風土で異なる特色を持っており、収穫から技法など風土気候を利用しつくられた地域文化の表れとも言える。

このように、和紙は地域の環境と共生した形で発展したため、例えば岐阜県的美濃和紙や鳥取県の因州和紙などのように、地域名が和紙の主な分類となっている。また、和紙の製法には原料の収穫から紙漉の技法に至るまでの様々な工程があり、最終成果物としての紙質に大きく影響するが、特に手間暇をかける工程には紙質の違いが生じ、その紙がどのように作られたか製法を辿ることで特徴を分類することができる。例えば、素材の調達から加工方法、薬品使用の有無、機械の導入など、手漉き紙の工程は少なからず出来上がる和紙の品質に影響を与え、製法による違いが生産地名と同様に和紙の大まかな分類となっている。

これらは全て先人の試行錯誤の結果であり、それぞれの和紙づくりの工程はきめ細かな作業の連続で膨大な時間と過酷さを伴う熟練の技術であったが、昭和初期に柳宗悦が手漉き紙の巧みな伝統

を取り上げるまで、和紙生産は衰退が深まり続けた。しかしそこには紙そのものを大切にしてきた日本人の感性に染みついてきた重要な面もあり、主に農閑期を利用した和紙生産は、その地域で栽培可能な植物から生産され、貴重な紙は盛んに再生も行われた。ここには持ちうる時間や気候・風土を上手く利用し継続的に生産を行ってきた近代日本のリサイクル文化の発想そのものが見られ、書写用紙としての機能性以外に広い用途のある生活デザインの素材として再評価することができる。

(2) 紙そのものが持つ情報

このように多彩な和紙文化に関して、その生産の工程は、原料、加工、製法（漉き方）など人や地域により個性があり、楮、三桠、雁皮等の原料の差、灰汁で煮るか薬品を使用するか、叩いて叩解するかピーター等機械を使用するのかなど成果物の紙質の決め手になる。また原料も楮や雁皮など以外にも、古来より使用されていた麻や竹から藁、桑、棉（キワタ）など身近で入手しやすい植物も使用され、現在では、ケナフ、イグサ、バナナ、パイナップル、サトウキビなど良質な繊維が取り出せる材料から様々な和紙が作られてきている。原料が異なることや物理処理の差などあれば、出来上がる紙の違いはさらに顕著であり、逆に紙そのものから叩解方法などの生産と行動の情報を読み取ることができる。和紙はその用途や美点により作り方そのものが違い、繊維密度の高い紙は、強靱で薄く、光沢、紙の張りなどに特徴があり書写、絵画用紙として優れ、密度の荒い紙はダイナミックな繊維の結合が表現され、照明器具などに利用するときの透過光などで見る様相は独自の繊維質により自然な美を感じさせる情緒的な紙が出来上がる。現在これまでの紙の機能から新たな価値観を模索しているが、培われた生産方法、質感や美点など感覚的な要素も含め和紙から読み取ることができる情報の価値を、その紙の持つ個性として追求できると考えている。

(3) ものの機能性から精神性へ

現在、多くのメディアが電子化している中、媒体として情報を伝えるための紙が一定の役割を終え、紙を見る視点は確実に変わりつつある。また人は古紙のリサイクル率などにも十分関心を持ち、森林伐採や環境汚染、菌止めが掛からない大量消費など環境リスクの低減に関して、紙ひとつとっても様々な行動や意識改革が求められている時代である。そこで人は、どんな紙をどのように使うのか自らが考え選択するが、機能や性能と合わせて環境意識やものづくりの心の部分にあたる精神性が、これからの紙の評価に加わってくると考えている。

手漉き和紙そのものから製法や材料の違いを読み取れることは、単なる紙としての価値よりも紙そのものが発するイメージを私たちは受け取り、そこから新たなデザインに応用することを試みることができる。例えば和紙の照明や天然染料の壁紙などから和む心や安心感を得られるのは、その素材がどこで、どのように、手間暇かけて作られたものであるかなど、その風合いを決定づける様々な情報が人の美意識に影響を与えている部分が大きいとも考えられる。

現在のものづくり観は大量生産の時代とは確実に違い、環境共生の糸口を様々な側面から模索・研究し試行錯誤が行われている。これまで機能性や経済性を中心としたデザイン概念から、さらに環境というキーワードが重要視され、負荷の少ない生産を持続してゆくサステナブルな社会構造が求められている。そこには消費者側の意識変革も必要であり、現状の大量消費を伴う生活に対し

て疑問を抱き、問題を解消すべく工夫を行い生活の意識改革ができる時代の過渡期にある。

これは全てのデザイン分野に関連する話であり、年々新たな価値観や機能性を持った素材が開発されるが、さらに人の心に訴えかける精神性やメッセージ性が付加されたデザイン概念が重要になってきている。そのような現代に、文化の伝承やこれまで人によって引き継がれてきたものづくり観へ敬意を表し、環境などをキーワードに読み取れることは、日本文化の独自性を生かす点で重要であり、次代のものづくりの思想的コンセプトになりうる概念として再評価できると考えている。

2 現在の進行状況

これらの考えのもとに、これまで実証性に乏しかった、様々な野草から和紙生産を広い用途のある生活デザインの素材として制作することを試みている。

現在までに、実施した野草は、15種の原料から50種程度の紙を漉き上げた。

エノコログサ（葉・茎）、水草類、彼岸花（茎）、オオイヌタデ、イタドリ、クローバー、ブタナ、オシロイバナ、ヒメシバ、アレチヌスビトハギ、ヨウシュヤマゴボウ、ツユクサ、キキョウなど実施を行ったが、どの原料も初めての試みであり、試行錯誤が続いている。しかし、これまでに漉き上げた紙からは、植物繊維の違いなどにより原料の個性が明確に表現されており、素材開発としては多様な紙が仕上がりにつつある。自然素材を使用するため、季節に応じた素材を探しさらに和紙のサンプルを増やして行きたいと考えている。また同時に様々な植物からの天然染料の実験等も行い、色彩の表現性についても検証を行っている。

本研究の発表は、出来上がった紙をより身近に参照してもらうため、実物展示での発表も計画している。



写真 現在までの進行状況

参考文献

- 1) 全国手漉き和紙連合会 『新版日本の紙（上・下）』 2006年
- 2) 同 『平成の紙譜』 1992年
- 3) 久米康生 『和紙の源流』 岩波書店 2004年
- 4) 同 『和紙多彩な用と美』 玉川大学出版部 1998年
- 5) 町田誠之 『和紙の道しるべ』 淡交社 2000年
- 6) 森島絃史 『知の起源 和紙のデザイン』 鹿島出版会 2003年